玉
涙

015914-000-3

特53-577

玉涙

大智／著

M26. 5

ABC-1733

4636

し-28

玉

涙

完

玉涙

王の涙
佛の涅槃
最後の供養
佛の病
四苦八苦
檀特山
阿闍世王

特53
577

阿難尊者
佛舍利

玉涙

釋大智著

○玉の涙

那須野が原の此頃い　北の山にい雪白く
梅の盛りに桃櫻　花は一時に咲きそろひ
鶯啼て雲雀さへ　心にかゝる雲もなく
自由自在に飛ふさまを　見るにつけても我身をば

鳥つばさにもおとるかと
かぞへて見れは八とせ前
たかき師匠の教訓と
いとあり難く思ひつゝ
名殘をしむもふり拂ひ
今目の前にあらいれつ
深き海をも厭ひなく
あづまの都ほどもなし

思へばいとゝ悲しけれ
なれにし國を出し折
親しき父の言葉を
祖母や母の涙もて
旅立つ時のいさましさ
高き山をも厭ひなく
法を求むる嬉しさに
尋ぬる高き法師は

流も清き小石川
はたほこたてゝ御佛の
光りかゝやくかほばせを
そより夜となく晝となく
目に見るものも御法なり
わきて愚の我身だも
道にかなふぞ目出度けれ
如何なる罪の報にや

目白の山に十善の
正しき法と起さんと
拜みし時のありがたさ
耳に聞くもの御法なり
御法の園に起き臥せば
覺えず知らず御佛の
されどとにも悲しきは
病の爲にさへられて

怠るとの耻かしさ
病の爲にこゝに來て
のどけき春も心から
花は咲けども我目には
胸のうさをも晴さんと
思ひ出るゝ都にて
折しもつぐる鶯の
鳥さへかくもあるものを

思ひ出せば去年の夏
今またこゝに來て見れば
風の音さへ物すごく
色も哀に見ゑにけり
あなたこなたを見渡せば
流れ出るは涙なり
法華經の音にれどろきて
あなはづかしの我身やと

たづさへ來る涅槃經
法華經きゝて涅槃經
いとも目出たき瑞相と
聲高らかと讀むうちに
おつる涙は七つ八つ

○佛の涅槃

あな尊しや御佛は
娑羅雙樹の間にて
ひもときながら思へらく
頃しも今は二月なり
心ひそ〳〵手を合せ
聲ゝどてやらひそまりて

拘尸那城にゝ跋提河
ころゝ二月の十五日

時に不思議や御佛の
有頂天までみちくて
濟度利生ことをへば
疑あらん者どもは
かく告げ給ひて眉間より
三千世界くまもなく
聞て驚く人人は
両手を擧て泣くあれば

神通力の其聲は
聞かぬ者とてなかりけり
今夜涅槃時いたる
早く來りて問をなせ
光はなちて徧くも
照し給ふぞ尊とけれ
憂ひ惱みて聲をあげ
胸を椎てさけぶあり

ふるひおのゝく者あれい
大地も四方の山山も
雙樹の青き葉の色も
涙おさへて人人は
ほとけ涅槃のその後は
佛の道を學ぶべき

涕にむせぶ者もあり
震ひ動くぞものすごし
白く變じて哀なり
疾く往くべし拘尸那城
我等みなしご何として
誰をたのみに長らへん
馳せくる者は山をなす
是等無量のらかんたち

佛の涅槃をとゞめんと
摩訶迦旃延優波難陀

佛の光にあへるもの
拘陀羅比丘尼を始とし
佛の涅槃とをがまんと
これら比丘尼の其中に
衆生濟度のそのために
菩薩まかさつ其數は
大慈大悲むねにみち
五戒とたもつ優婆塞ら
聲をはなちて泣き叫ぶ
六十億の比丘尼たち
泣き〳〵いたる哀さよ
位十地の菩薩あり
かりに女人とあらはれり
恒河の沙に喩へたり
我等を觀ると子の如し
佛の御身を閣毘せんと

手手に栴檀天木香
七寶微妙の光あり
かざるに優鉢羅芬陀利華
十二由旬に滿ちみてり
聲を擧てぞ泣くさまい
哀みたれて御佛よ
時をしりつゝ御佛い
願いたさずまず〳〵と
是等薪にかのづから
塗るに鬱金沈水香
その外供養數多く
佛の足を禮拜し
天地も爲に哀動す
われらが供養受けたまへ
受け給はねば優婆塞ら
憂ひ惱むぞあはれなり

時に無量の優婆夷らは
菩薩大悲の化現なり
佛に向ひ言へるやう
我等が供養受け給へ
受け給いねば優婆夷らは
毗舍離城の離車子とて
恭敬供養いとふかし
八万四千の駟馬寶車

おもてい女人其實は
供養の物の具さゝげつゝ
哀みたれて御佛よ
時をしりつゝ御佛い
さらに悲しみくるしめり
邊地の王は眷属と
八万四千の大象に
八万四千の妙寶珠

天木栴檀沈水の
かかる供養をもたらして
受け給はねばせひもなし
五恒河沙と聞へたれ
默して許し給いねば
毘舍離王を始とし
到らぬ者はなけれども
いまだ來りましまさず

八万四千の薪あり
最後の誠つくせども
大臣長者其かずは
おの〳〵供養さゝけども
憂彌增增すにけり
あらゆる閻浮の王夫人
阿闍世王とその夫人
その時無量の天女あり

佛の出世いとかたし
我等も供養せんものと
涙ととともにあま下り
佛をめぐる百千たび
我等最後の供養をば
ましませ給へと願へども
御顔まもりてなく〳〵も
天龍八部人非人

最後の供養なほ難し
設くるものは微妙にて
佛の足を禮拜し
哀みたれて御佛よ
受て我等が福德を
許し給はぬ御佛の
退くさまぞかなしけれ
花をさゝぐる象あれば

乳をさゝぐる牛もあり
迦葉阿難を除く外
愛の海に沈みけり
おの〳〵菩薩を使して
四十由旬のその間
微塵の空地もなかりけり
四無量心を捨て給ひ
永く涅槃に入り給ふ

時に閻浮の比丘比丘尼
つどひ〳〵てもろ共に
十方佛土の御佛ゝ
釋迦牟尼佛を供養せり
天龍八部みち〳〵て
哀れなる哉御佛ゝ
我等が供養うけずして
あな苦しやと堪えかねて

身の毛は竪ち血は流れ
三千年の今ごろに
おもひやるにもいとかなし

○最後の供養

時に大會のその中に
衆生あはれと思ひてぞ
偏にはだぬぐ右の肩
たなごゝろを合せつゝ
我を忘れてさけぶ狀
聞くさへ胸もふさがりて
純陀といへる優婆塞い
からだの威儀をなげ捨てゝ
右の膝をば地につけて
涙ながらに御佛の

御足を禮し言へるやう
我等最後の供養をば
世尊今よりわれ〳〵ゝ
あはれ我等を思しめし
涅槃したまへ無上尊
切なる願いれ給ひ
阿僧祇劫の昔より
煩惱身を捨てたまひ
哀みたれて御佛よ
受て衆生を度し給へ
親なき犢に異ならず
我等が微供を受て後
時に御佛衆生らの
純陀が供養うけ給ふ
佛もとより食身と
金剛不壞のからだなり

衆生濟度の其ために
時に大會の衆生らい
さゝぐる供養うけなんと
踊り躍りて皆俱に
佛の出世優曇華の
法を聞くことまた難し
汝純陀い人にして
時に純陀いうれしさに

かりに供養を受け給ふ
佛我等を哀みて
の給ふ聲に喜びて
純陀を讃めて言へるやう
希に出るにさも似たり
最後の供養いと難し
心は佛の心なり
復も佛に白すやう

佛我等を子の如く
なぜか涅槃に入り給ふ
生死の海に漂ひて
我等凡夫を悲みて
久く世間にましませと
あらゆる世間悉く
たかきいやしき差別なく
蘇迷盧山も劫末に

哀み給ふものならば
あとに遺りし吾くい
いつか彼岸に到るべき
今夜の涅槃やめ給ひ
いともあはれに願へども
無常の風にうつされて
うつり行くこそはかなけれ
燒けて微塵もとゞまらず

もろき此身は草の上の
況して此世ゝ四苦八苦
あらゆる塵を洗ひすて
其樂しさいかばかり
止みね純陀よ言ふ莫れ
請ふてやまぬゝ文殊師利
問ひつ答ひつ御佛の
かゝる内にぞ時至り

日をまつ露に異ならず
火宅の中にさも似たり
欲を離れし樂しさよ
佛の境界不思議なり
諭し給へど彌增に
なだめ給へど聞き入れず
常無常をあらいせり
泣き〳〵純陀は眷屬と

佛の御身をめぐりつゝ
深き心ぞありがたし

○佛の病

菩薩摩訶薩名は迦葉
滅後の吾等を哀みて
長き壽と金剛の
佛の說と魔の說と
三十四問を發してぞ

去りて食具を供辨する

佛の神力うけながら
佛の御前に偈と說て
不壞のからだは如何に得ん
そもまたいかに辨へん
無量の衆生を利益せり

時ぞ至れば御佛い
歎く大衆を慰めて
我涅槃に入りてより
常にすぐれる樂を受く
終に飢渇の患なし
法の常住修行せよ
羅睺羅の如く異ならず
汝等深く御佛の
純陀が供養うけて後
汝等歎くこと莫れ
己に無量の歳を經て
己に食想離れなば
汝等應に御佛と
佛世間を視たまひて
云何そ永く涅槃せん
常樂我淨を願ふへし

憂ひ惱みて啼くなかれ
供養の華は大空に
かくてはどなく御佛は
迦葉菩薩は驚きて
金剛不壞の御佛が
煩惱ありてそ病あり
如何そ病との給ふや
衆生の病いやさんと
聞て喜ぶ人天の
風のまに〳〵ひるがへり
病と唱ひ臥し給ふ
已に病を免れて
此有樣はあやしけれ
煩惱はなれし御佛が
無量劫の昔より
發せし願行無量なり

云何そ世尊今日は
外道愚人は御佛に
起きて妙法説き給へ
あはれ御佛我〳〵が
衆生に利益施して
碎き給へとねがひたり
衆生の心しろしめし
放ち給へる光明い

病ありとの給ふや
無常の想起すべし
病者の如くすべからず
願を入れてもろ〳〵の
あらゆる外道の慢心を
時に御佛大悲もて
即ち起きて結加趺坐
虚空界にみち〳〵て

十方上下の御佛の
時に天龍人非人
讃嘆してぞ喜べり
御佛及び僧たちに
拘物頭華に芬陀利華
其外天の寶幢や
供養の誠つくしつゝ
無量劫の難苦行

世界を照し給へたり
聲を同時に御佛を
或は歌ひあるい舞ひ
ちらせる華は優鉢羅華に
摩訶曼荼羅華曼荼羅華
音樂以て御佛に
我等がために御佛は
如何そ本誓すてたまひ

今夜涅槃に入り給ふ
我等が病療治して
聽けよ迦葉御佛い
百万劫の昔にて
そより以來身と心
我今實に病なし
佛を師子と言ふ如く
是は如來の密語なり

如來世尊は大醫王
早く苦み拔き給へ
無量無邊億那由他
已に病根除きたり
苦惱はなれて安らけし
病と言ふい密語なり
而も佛い師子ならで
佛は實に病なく

亦涅槃に入りもせず
聲聞緣覺知りも得ず
虛空本より去來なし
去來生滅離れたる
病あるべき理は
皆是れ我等をさとさんと
思へばいとゞありがたし

○四苦八苦

佛の甚深大涅槃
況して愚の凡夫をや
諸佛世尊も其如く
金剛不壞のみからだに
なしと云ふさへ愚にて
示し給へる方便よ

凡そ此世に生れて
四苦と八苦は誰人も
衆生あはれと御佛の
これを悟るに外ならず
おろかの我等と諭さんと
説かせ給へし有難さ
目出度事に思へども
老病死苦はつきそひて

たかきひくきもおしなべて
免るとはよもあらじ
八十年の應現も
殊に涅槃に臨みつゝ
いともやさしき譬もて
生れし時は誰人も
生るゝとのある上は
あらゆる苦み備はれり

みめよき女人の珠をもて
見る主人は嬉しさに
そもまた何しに來給ふや
功德天とは吾事よ
珊瑚琥珀も硨磲碼碯
聞て主人は躍り舞ひ
禮拜いとなむ其内に
醜き顏は垢黑く

其身と莊り入りければ
汝い何の誰にして
女人答へ言へるやう
金銀瑠璃も頗梨眞珠
意のまゝに與へんと
燒香散華供養して
又も一人の女人あり
やぶれし衣纏ひつゝ

主人に告て言へるやう
あらゆる財寶失せなんと
汝去らねば殺さんと
汝が家の功德天
吾と姉とは相與に
吾を驅りなば吾姉も
功德天も立ち出でゝ
我と愛せば彼も亦

我行く處悉く
聞くや主人はおどろきて
言へば女人は汝愚痴
吾姉とい知らざるか
離るゝとの出來ざれは
共に出せと言へければ
實に妹の言ふ如し
めでさせ給へと言へければ

さらは何れも出よかし
罵りければ二人づれ
其よりまたも伴ひて
喜び留ゆてひつ迄も
生るゝとのある上は
離れぬものと心得て
厭ひ捨つるぞ賢てけれ
氣力衰へ脊は曲み

あな愚なる事かなと
共にひきゐて去りにけり
貧しき家ゑ往きければ
住し給へと願ひけり
老病死苦はつきそひて
生くも死ぬるも皆與に
生れし上ん年よりて
顏はしはゞみ齒ぬけて

眼はくらみ耳遠く
死と待つさまゝ燈火の
四百四病いつも〳〵に
出で入る息のかよはねば
罪の重荷を負ひながら
呼べと叫べど誰ありて
身の毛はよだちおの〳〵さて
愛別離苦いとさらに

人にうとまれ罵られ
いつか消えなんいかなさよ
常に此身を苦しめり
妻子珍寶なにかせん
くらき闇路を唯一人
答ふる者のあらばこそ
おもひやるさへ畏ろしゝ
憂の中の憂なり

父母に離るゝ憂あり
貪愛離れし其時は
瞋恚の焔滅せねば
此身を惱め苦しめり
常よ此身に隨へて
五盛陰苦いまねかれず
火宅の中に在りなから
苦に苦を重て末終に

妻子に別る憂あり
憂畏もなかりけり
怨憎會苦も日〳〵に
求めて得さる苦みも
生を受る上からい
我等衆生いおろかなれ
かくとも知らでいやましに
佛の慈悲にも漏れねべし

迷へる凡夫いあさましゝ

○檀特山

檀特山は峨々として
流るゝ泉清らかに
華い絶えなく香しく
かゝる菓を食ひつゝ
あらゆる外道の經論を
心の塵を掃ひ捨て
雲の上までそびえたり
樹林藥木みちみてり
菓は甘くおびたゝし
難行修せる菩薩あり
さとり究めて遺りなく
佛の悟もとめんと

無量歳を經たれども
まして御法は絶えてなし
帝釋天の天子たち
時ゝ一りの天子あり
菩薩と名くる者ありて
苦しき行を修めけり
滿るを見れど貪らで
妻子眷屬身命まで
佛の御名をきかばこそ
されど勇猛の精進に
おの〳〵つどひて怪しめり
帝釋天に白すやう
衆生の爲に諸〳〵の
設ひ珍寶山海に
涕唾を視るに異ならず
棄てゝ佛の菩提をば

求むる者と知られたり
實に汝が言ふ如く
吾等も當に諸の
さいさりながら菩提心
成ずる者はいとまれに
動き易きにさも似たり
さも畏しき夜叉となり
清き聲にて過去佛の

聞て帝釋言へるやう
是人菩提を成じなば
御法聞くことと嬉しけれ
發せる者は多けれど
水にうつれる月影の
彼が苦行をためさんと
檀特山にあまくだり
所説の半偈と唱へたり

色いにほへと散りぬるを
聞て菩薩は嬉しさに
船よ遇へたる心地にて
兩手を以て髪を擧げ
唯畏しき羅刹のみ
そも何者のわざならん
思えどかゝる形にて
さりとて外に人はなし

我世たれそ常ならむ
溺るゝ者の忽ちに
即ち座より起ちながら
あたり視れども人はなく
佛の御聲を震へしは
將た羅刹にやあらんかと
などか此偈を説くべきぞ
兎にも角にも尋ねんと

畏るゝ色あく側近く
何の處に聞き得しや
三世の佛の正道を
羅刹答て言へるやう
我に此義を問ふ莫れ
問へば羅刹はかぶりふり
吾若し語らば人人い
此山中に我一人

善哉汝今の偈は
是の如くの半如意珠
聞かまほしゝや今半偈
我今飢に苦しめり
食ふ所は何物と
汝問ふとも無益なり
畏れ驚き悶絶せん
聞て畏るる者はなし

是非に說けよと言へけれは
食ふ所は人の肉
汝半偈を說よかし
羅刹疑ひ信せねば
菩提の爲に棄る身は
瓦の器施して
脆き此身を供養して
其嬉しさい幾何ぞ

羅刹答へて言へるやう
そはまた易きとなれば
聞て此身を供養せん
汝疑ふとなかれ
塵わくたより尙輕し
寶の器得ん如く
金剛身を得るとの
我今いつわり無きことは

三世の佛がしろしめす
さすがの羅刹も感じ入り
有爲のれく山けふ越えて
菩薩歡び堪へがたく
身を投げ給ふ折柄に
墜る御身を接取して
善哉眞の菩薩なり
我等と濟度し給へと
誠つくせし御言葉に
されば說くべし聽き給へ
淺き夢みし醉ひもせず
高き樹木によぢのぼり
羅刹と見へしい帝釋天
恭敬禮拜いとなみて
菩提成就の其時は
菩薩の足を頂禮し

別を告て還りにき
修行し給ふ因緣を
說かせ給へし物語

○阿闍世王

父を殺せし阿闍世王
是迄作せし惡逆を
瘡を生して膿流れ
是は謂ゆる華報にて
是は御佛前世にて
聖行品の其中に
畏多くもありがたし
解脫の時や至りけん
悔みしあまりからたには
苦しさ言はん方もなし
地獄の苦み程なしと

深く因果を信じてぞ
韋提希夫人は悲しさに
我子あれと思し召す
母のなさけに阿闍世王
ゆるさせ給へ我母よ
自ら來せし業なれば
鬼の吾身をかくまでも
心には似ず是迄の
畏れ給ふぞ殊勝なり
種々の藥をとりあつめ
心の内ぞいとしけれ
涙ながらに白すやう
かゝる病は心より
癒ゆべきとはよもあらじ
いたいり給ふ母上の
惡を思へば今更に

畏多しとばかりにて
時しも大臣伺ひて
かくは愁ひ給ふぞや
逆害なせし我なれば
來らんとを畏てぞ
われ良醫の救ふだに
なぞか愁のなからんや
思ひはべらぬ仰かな
歎きたまふも理よ
いぶかし大王何故に
辜なき父と横さまに
地獄の責の忽ちに
かくは愁ひ悲しめり
無しと思へば尚更に
こは大王の語とも
父を殺して王位をば

繼ぎにし者は數多し
一王とてもこれあらず
誰か見し者あるべきや
愁彌増ますばかり
ます〳〵多きが如くなり
清き梵行修めつゝ
大王彼に往き給へ
いともたくみの言葉もて

されど愁ひて惱む者
まして地獄に落るもの
常に愁ひて苦しめば
喜みて眠れは眠また
富蘭那とて大師あり
衆生の爲に法を説く
あらゆる罪は消えなんと
奏聞をぞなしにけり

其外五人の大臣ら
道を演べてぞ大王を
時に來るは耆婆大醫
答ひ給へて阿闍世王
時に安く眠るべし
衆生を救ひあれまば
我今病危篤なり
地獄の責遠からず

おの〳〵已があがめつる
さとし示すは殊勝なれ
大王安く眠れるや
あらゆる煩惱斷ち捨てば
父母と敬ひ尊びて
時に安く眠るべし
父を殺せし報にて
云何そ安く眠らんや

聞て耆婆はうれしさに
罪を造れど慚愧あり
慚愧を懐き懺悔せば
罪を消すとぞ説き給ふ
佛の慈悲い無量にて
普く觀て差別なし
拘尸那城の西北方
無量の法門説き給ふ

善哉大王もろ〳〵の
佛常にの給はく
火の能く物を焼く如く
愁ひ給ふな大王よ
怨なるものも親しきも
此を去ると十二由旬
娑羅雙樹の間にて
御佛ならで大王の

罪の消えなんともなし
折しも虚空に聲ありて
絶えなんとの悲しさよ
闇き世間をいかにせん
未來は無間よ墮落して
少しも早く御佛の
汝が父の頻婆娑羅
かくは來りて告ぐるなり

涙と共に諫むれば
佛の御法程もなく
法の燈明滅しなば
汝が罪はいと重し
いつか出なんともなし
御法聽けかし我はこれ
汝あれと思ひてぞ
聞て驚く阿闍世王

問絶して地に倒れ
もだえ苦しむ有様は
佛は雙樹の間にて
放ち給へる光明に
見るまに瘡毒癒えけれい
嬉し涙にむせびつゝ
供養の物を供辨して
拘尸城さしていでにけり

からだの毒熱いやまして
此世からなる地獄なり
いともあはれに思召し
阿闍世王の身を照し
夢見し心地に大王は
忽ち供奉を命令し
夫人太子と諸共に
嚴駕の寶輦万二千

大象其數五万なり
摩訶陀國の人民ら
王の前後に從へり
無量の大會にとりまかれ
かこめるさまにさも似たり
大王よと告げ給ふ
顧みれども誰ありて
阿闍世王よと御佛の

從ふ馬騎は十八萬
五十八万諸共に
程なく到れば御佛は
あらゆる星の滿月を
佛微妙の音をもて
阿闍世王は右左
答ふる者の無き内に
再び喚ばせ給ふにぞ

飛びたつごとに阿闍世王
罪惡つよき吾身をも
あな尊とやと喜びて
佛の足を頂禮し
無量の功德蒙りて
無上菩提の大心を
佛に遇いぬわれ〳〵は
されど佛の語にも
歡喜の汗に身をひたし
捨て給はぬ御佛よ
香華伎樂を供養して
御法聽くと時移り
あらゆる眷屬悉く
發せしとを聞くにつけ
哀の中のあはれなり
波羅提木叉い我身なり

汝等是を修行せば
正法あらん處には
いとたのもしき御言葉を
拘尸那城も今こゝに
あなあり難き事よこそ

○阿難尊者

阿難尊者い餘處に在り
佛陳如を呼び給ひ
如來在世に異ならず
半月毎に來るぞと
信じて勵むものならは
あらはれもせん娑羅雙樹
未だ來り給はねば
阿難はいづくよ在りとする

おそか歸りのおそきぞと
此を去ることほど遠く
無量の魔に嬈され
獨り憂ひて苦しめり
佛の姿とあらはれて
或は神力示現して
阿難意に念ふやう
起たんと思へど語らんと

たづね給へば陳如比丘
十二由旬の外に在り
歸らん道を知らずして
天魔かの〳〵身を變じ
無量の法を演說す
八相成道あらはせり
かゝる神變未だ見ず
思へどすべて儘ならず

そが爲め未だ至らずと
佛に白して言へるやう
あらゆる功德成就して
是の如くの涅槃典
阿難の所在問ひ給ふ
佛文殊に告げ給ふ
王舍城に住める時
此中誰か我がために

語ると聞て文殊師利
此中無量の菩薩あり
堅固の心備へたり
何ぞか流通に憂へんや
そもまた何の爲なりや
成佛過ぎて三十季
汝等比丘に言へるやう
左右に給仕しかもまた

十二部經を受持せんや
堪ゆる者のあらざれば
阿難比丘が此任に
五百の羅漢とともに
三の願を御佛が
時に五百の阿羅漢ハ
我ゆるして阿難比丘
八種の不思議と具足せり

時に五百の阿羅漢に
爾時目連定に入り
堪ゆべきとを觀知して
しきりに請ふて已まざれは
聽し給へばうけがハん
阿難の願を求めたり
我に事へて二十年
二十年來聞くところ

一たび耳に經れて後
瓶の水を一瓶に
具足受持してのこりなし
あらゆる經典悉く
かくは所在と尋ねたれ
阿難をひきゐ來るべし
受て文殊は忽ちに
歸るおそしと御佛は

再ひ問はぬ賢こけれ
瀉すが如く悉く
我今涅槃の其後は
阿難に囑せんその爲に
汝文殊よ彼に往き
魔衆對治の大陀羅尼
阿難と俱に歸りけり
阿難に告ての給はく

須跋陀羅てふ大外道
五通と得て自在なり
未だ憍慢捨てやらす
佛の涅槃時近し
汝阿難は昔にて
須跋陀羅が子と生れ
喜び汝が語には
阿難に隨ひ須跋陀羅
今歳齢百二十
非想非非想得たれども
汝往て語るべし
早く濟度を仰ぐべし
五百生のその間
愛心未だ盡きざれば
隨ふべしと告げ給ふ
忽ち來る奇しけれ

それより問答時移り
是迄悟と思へしは
あらゆる我見うちくだき
阿羅漢果を得たりしは
連なる人天ことくく
またも悲號の聲起り
もだえ苦しむ人心
水の音さへ異なりて
佛の御法聽て見ば
尚も迷の中なりと
心開けて忽ちに
是ぞ最後の濟度にて
歡喜の涙程もなく
佛を慕ひ悲みて
心あらねど跋提河
月もあはれに影くらし

○佛舍利

これは古師の作なるを今佛舍利と名つけてこゝに附錄す

生滅常のことはりゝ
凡聖共にまぬかれす
中にもとに悲しきは
能仁世尊の涅槃なり
濟度利生のよそほひゝ
西土の塵にまじへつゝ
說法儀式のかほばせゝ
鷲峯の雲にかくれにき
れよそ四十餘年の
敎文その數多げれと
皆これ利生の法なれば
衆生の得脫ひとつなり
然るに化緣つきはてゝ
衆生の濕たえしかば

萬德尊のかほばせゝ
金棺永くへだてたり
時に其會の人天ら
如來の涅槃と悲みて
悲涙をおさへ地にふして
愁嘆せしてそあはれなれ
或は雙樹の下にして
眼を閉る者もあり
或は提河のほとりにて
涙にたゞよふ者もあり
されとも荼毗の時至り
栴檀薪をつみしかば
自ら胸より火をいだし
霞と共になりたまふ
その時大衆もろともに
煙やうやく絕しかば
泣く〳〵涙とおさへつゝ
舍利を分てかへりにき

釋尊滅後二千餘
如來在世のいにしへを
生死の道をいかにして
金口の詞と仰ぎつゝ
何なる五十二類だに
いかなる我等が人身の
雙樹の青き葉の色も
戀慕の姿あらはせる
さりて佛にあいざるは

我等が悲ふかきかな
纔に聞くさへかなしけれ
誰を知邊とたのむらん
長夜のしるべとたのむかな
花を合てまいるらん
おとりて其緣なかるらん
白く變せる枝ごとに
木木の梢もあはれなり
恨の中のうらみなり

されども滅後の此頃は
月氏の遺跡おもひやり
燒香散花禮拜し
如來最後のことばにも
如來在世の生身を
三千法王世をさりぬ
我等をすてずはぐくみて

あくまで法を逢みつゝ
涅槃の像に向ひつゝ
恭敬供養いとふかし
滅後の形像供養せば
供養するにも異ならず
涅槃の跡にとゞまれる
哀愍納受たれたまへ

1-28

明治廿六年五月廿四日印刷
明治廿六年五月廿八日發行

著作者　釋大智
東京小石川區關口駒井町六番地

發行兼印刷者　梶寶順
東京淺草區吉野町十三番地

發行所　經世書院
東京淺草區吉野町十三番地